



はじめに

著者	足立 眞理子
引用	女性学連続講演会. 2004, 8
URL	http://hdl.handle.net/10466/9979

はじめに

大阪女子大学女性学研究センター、第8期女性学連続講演会は『ケアの現在—制度と現実のはざま—』と題して、現在の日本における介護保険制度導入以降の現状、そこから浮かび上がる問題——ケアという労働とは何か、ヘルパーの社会的位置付け、市民参加のあり方——を、多面的な方向から考えました。また、グローバリゼーションの時代を画するケア労働のグローバル化について、日本の現況はどのようなものであるのかについて、今後の課題として取り上げています。

ケアという労働は、「女の仕事」として、「家内性」と結び付けられて語られてきました。この講演会では、このことを二つの側面から取り上げています。第一は、ケアが女性の役割の延長にある行為として、現在もなお社会的に慣行化される側面をもつことによって、ヘルパーという職種が、賃金労働における職務・技能の分類という区分化とは異なる社会的位置づけを受けることに関係する問題です。第二は、ケア労働が現在においてもなお、「労働」という概念に「馴染みにくい」側面をもつとしたら、ケアという労働は、いわゆる一般的生産的な労働とどこがどのように異なっているのか、このような労働は、社会的分業のなかに組み込まれるのか、という問題です。また、そこへの市民としての参加の意味と意義とは何なのでしょう。さらに、グローバリゼーションの時代においては、どのような変容を受けるのでしょうか。これらについて、この連続講演会が有効な論点を提供でき、みなさんとともに考え、日々のなかで活かしていくことができるきっかけとなればと願っております。

なお、本記録集には、第7期連続講演会をもとにした、足立眞理子「不況と女性」もともに収録いたしております。第7期連続講演会記録集とあわせてお読みいただければ幸いです。

女性学連続講演会・連続セミナーに積極的に参加され、熱心に討論していただいた皆様に心から感謝申し上げます。

大阪女子大学 女性学研究センター 専任研究員
足立 眞理子